

◆2009年 11月

八木健選 「七句」・・・ (鑑賞も五七五)

1. 立読みの仲間入りする文化の日 (有吉堅二)

立読みで脚を鍛える体育の日

2. 地下鉄の窓に日除の見当たらず (伊藤浩睦)

全体が日除けなんだよ地下鉄は

3. 馬にくはれ句史に輝く木槿かな (草薙一朗)

古池の蛙もなんとかせにやならん

4. がに股の利点を活かし春泥道 (佐藤古城)

背高の利点を活かし柿をもぐ

5. 苦瓜や断りきれぬお裾分け (鈴木 栄)

苦瓜を貰ひ苦虫噛み潰す

6. きのごめし異国の松茸うすく裂き (高橋 都)

うすく裂く癖がなかなか抜けなくて

7. 背の毛虫教えてくれただけの人 (久松久子)

見て見ぬふりよりええじゃんか

青山桂一

菜園の主は秋もの支柱なし
総義歯にあとわずかなり秋日ざし
色眼鏡かけて人生秋の景

高橋 都

きのごめし異国の松茸うすく裂き
結界を越へてどこまで彼岸花
ほめあつてなぐさめあつて敬老会

秋月裕子

丑三つ時草木眠れぬ残暑かな
不調法詫びる墨跡水澄める
草の花峠の風に身をまかせ
寒き夏天に龍巻地に洪水
向日葵の裏は静かな路地ぐらし
老鶯の鳴き間違えて愉します

高橋素子

松茸のかけらにもある季節感
風船を隠しきつたる秋のそら
こおろぎやお前も一匹さびしかる

秋月裕子
寒き夏天に龍巻地に洪水
向日葵の裏は静かな路地ぐらし
老鶯の鳴き間違えて愉しませ

高松雄三
水なのに夏瘦しないダイエットー
曼珠沙華ぐうちよきばあのならびけり
カカナビの言なり走る紅葉狩

麻生やよひ
突き刺されなほも逃げ腰衣被
相変わらず上から目線鴟猛る
アンテナは感度良好曼殊沙華

田中章子
すすき野の中に少年泳ぐやう
草もみじ踏まず行けば遠回り
はりきりて仲間はずれの金叩

足立淑子
サリー脱ぐと一枚の布クリスマス
依怙鼻肩するかも知れぬサンタの目
顔見世に女のわたしから誘う

種谷良二
明細の数字細りて螻蛄鳴く
秋の蠅狭き我が家の主となり
蟻地獄蟻落ちずして飢餓地獄

有富洋二
逃げし魚目で追ふばかり秋の空
五十肩上げ下げしては新酒会
米消費推進委員案山子也

田村米生
もう秋や夫婦喧嘩ももう厭きた
露天湯に老妻蜻蛉ひとり落つ
毒茸の色香に惑はされにけり

有吉堅二
新走り決めかねてある休肝日
立ち読みの仲間入りする文化の日
秋の魚焼く煙にむせが火伏札

飛田正勝
相客にそれぞれドラマ夜の秋
止り木に酔ひて潰れし敬老日
独り聞く身に入むラジオ深夜便

阿部陽子
読めぬメニュー頼めば茸出されけり
もう一つ湖あると霧を指す
まつ先に秋刀魚買ひけり帰国して

戸谷笑子
別腹に食べ放題の秋の旅
夢二の忌黒猫を愛で夜もすがら
洋妾に出船霧笛の遠ざかる

安藤淑子
敬遠の敬と勘ぐる敬老日
何事も起らず終る敬老日
天高く医療費高き高齢者

永井一朗
台風の目と睨み合ふ气象台
蠅螂の三角野郎けんか好き
蔓引けば笑ふ通草に鳴く小鳥

飯塚ひろし
吊し柿村々重くなりけり
秋日和お墓は要らぬ千の風
転んでもただでは起きぬ運動会

中沢荘荷
秋神輿レンタルなれど幅きかす
桐一葉落ちて天下の霞ケ関
落選の身に吟醸の新酒かな

井口夏子
鬼灯や恋し恋され赤くなる
くすぐれば心を閉ざしねむりぐさ
友集いくる緑蔭の大風呂敷

永島董玉
偽りは人に為とや曼珠沙華
致死量に少したらざる月夜苜
とつくりと考へもせず温め酒

池田無了
神輿駆けるギャル二三人ぶらさげて
喜寿傘寿の撫子卒寿の女郎花
秋の夜や虎造節は駿河より

西 をさむ
震災忌折り目正しき作業服
螻蛄鳴くや競馬帰りの道すがら
九月場所ここは大和の国技館

伊藤浩睦
潮干狩韓国産の貝撒いて
時鳥出血サービスなりし声
地下鉄の窓に日除の見あたらず

原田 曄
颯風に右折の辻のありにけり
かまきりの相手してやる日暮かな
敬老日野村監督呵々大笑

稲沢進一
「もう秋ですよ」言っているような雲
落栗や目が点となり線となる
かなかなや俳句は切れ字ばかりかな

彦阪義久
厚化粧している言葉敬老日
立ち食いのコロッケ旨し翳雲
妻と毒女と母かそぞろ寒

井野ひろみ
棚経は寺の長男幼顔
歩道橋よき見所なる花火かな
大花火真ん中を飛機通り抜け

久松久子
背の毛虫教へてくれただけの人
退院てふ強制送還終戦日
面の皮も厚くなります種なすび

今城夏枝
緑蔭に入るひそひそ話せんと
夏霧に突入をしてハイウェイバス
夏草の天国廃屋の庭は

日根野聖子
指先で揺らし蓑虫らしくする
長き夜やテレビ観るでも消すでもなし
柔らかきことの無防備青芋虫

越前春生
延命の水飲みすぎたし厄日かな
満月を眺めて何を忘るるか
よしあしも喜寿となりたるちちろかな

広瀬遊亀男
六方のごとき飛びして秋揚羽
帰省子に瘦せ隠す術尽きにけり
足だけは一本あと奇天裂なかかし展

奥脇弘久
秋涼し微かに応ふ膝の皿
酔芙蓉晚酌促す彩となり
昼間から泣き言繰り言きりぎりす

藤岡蒼樹
雀散り案山子直立不動のまま
望の月飯場花札更けにけり
百歳の縁うたた寝やきりぎりす

笠 政人
露草の伸ばすポパイの腕つ節
つれづれの臍のゴマ粒秋日和
露けしや抱擁かたき道祖神

藤森荘吉
本当は蟻より利口きりぎりす
昔盆今CDのやうな月
大きくて未来しか見ぬとんぼの月

加藤澄子
月光る皿の兎の目も光る
終バスを降りて満月つれ帰る
真之の文読む子規の忌なりけり

藤原セツ子
近づいて来る涼風の忍び足
野の花ゆるる父の忌の文机
トンボの眼欲し手遊びの針の穴

加藤 賢
ともかくも首振る秋の扇風機
手入後の松の葉先の尖ること
蛇穴に入る渋滞の先頭車

二神重則
思春期の唐もろこしや垣根越え
今灯けるまだ灯けないと秋の暮
サギ来たり刈り田のカラスで黒を白

川島智子
大文字の大的如くに大往生
園児より親盛り上がる運動会
マネキンの案山子捨てられ胸あらは

坊野留吉
かみなりに埴輪の眼くり抜かる
生き残る軍手軍足敗戦忌
敬老会歳に差異など無き如し

北村真佐子
ウイルスや二学期視野に入れており
敬老日明治がぐつと近くなり

前川敏夫
遺言のセミナーに通ふ生身魂
大木を鳴動させて蟬一匹

三日月の夜や木星名乗りあぐ

無花果のどこからが皮どこまで実

久我正明
タトゥあり熟れたからだのメロンかな
風そよぎ庭を清めて白き萩
メタボ馬霜降りなどとおだてられ

松尾軍治
膝枕ふと手止まりし虫しぐれ
浅草寺サンバのリズム秋暑し
ドンブリにサイコロ投げしちんちろりん

草薙 一朗
邪馬台にまたも新説燈火親し
重陽や銀座に中国人の客
馬にくはれ句史に輝く木槿かな

松田吉憲
どの顔も土地売らぬ顔稲架を組む
教会に仏具のバザー秋うらら
流星や長生きといふ幸不幸

工藤泰子
弘法の選んでをりし猫じゃらし
筆太にたてヨコ斜めねこじゃらし
蜻蛉の空気を読んで飛びぬたり

丸山 紘一
栗田かセンセイはしやく盆踊り
よさこひにさうらん阿波と夏跳ねり
独裁のご破算成りて夏終わる

倉方 稔
団結を誇るはいつ時曼珠紗華
女傑とて白旗上げし夏の風邪
ダム無駄とチュウシ中止と虫すだく

三木蒼生
善哉を食ぶ善人や秋彼岸
特攻隊てふボランティア敗戦忌
干涸びし手足攻撃蚊の名残り

黒澤正行
諍いし妻と二人の良夜かな
後の月三つ見ている乱視かな
兼続を横抱きにして菊師来る

三塚不二
魚焼く匂ひに消され虫の声
月光を仰ぎ小町となつている
体育の日や節々の音濁る

黒田忠一
天高し孫のチンポコ上を向く
金木犀薄化粧の女通り過ぐ
男嫌ひ然れど芋煮は良く食べる

三橋一笑
個人情報いつばい干して秋の空
掃除機の秋思吸ひ込み前進す
磨崖佛のお声かしら虫の声

小杉 隆
秋の雷にらみ合ひして点滴す
写経する服の白きに蚊のとまる
指細き益良男呼ぶ開戦日

虫倉蟬音
七輪を急ぎ熾すや翳雲
這ひはひの孫黙々と大掃除
半分は孫の好物手用意

桜井宇久夫
秋の川ゴルフボールの寄る岸边
気の萎えてかなかなと暮れにけり
秋深む頻尿薬のコマーシャル

むつみ
苦瓜や妻の目線の外れたる
鯛焼きの白にこだわる相撲取
新米の秋田小町に一目惚れ

佐治洋一
よれよれの背広が歩く蟬時雨
颪風と地震と選挙一過せり
紅葉の電車に消しゴム鎮座せり

村上美和
白杖のすいすい進む虫の夜
冷房の感度良好術後の手
競ひ合ふ隠元豆の力こぶ

佐藤古城
抱いて寝て三毛に仔猫を生ませけり
妻側に連合組まれ木の葉髪
がに股の利点を活かし春泥路

百千草
落花火押上げてある揚花火
行こか戻ろかかなかなに聞いてみる
尺取虫一分一厘言ふなけれ

佐藤義子
穂先ゆれイナゴライダー飛びはねる
何おこる風船かずらはじけそう
ゆるる恋寄り添う恋もコスモスよ

佐野萬里子
インドルピーしほれば汗の出るような
「ミス三重」が故郷の津へ里帰り

佐野ゆきこ
落葉かき春待つ花におすそわけ
うらやまし枯れても色気紫陽花の花
歩む手のリード変わりし母息子

柴田真一
吃衄の球受けるまで汗をかき
昔人腹に一物屁で二物
平行根どこまで続く雲の峰

清水吞舟
だんまりも会話のひとつ秋灯下
金太郎四股踏むたびに木の実落つ
秋うらら音痴を詫びるバスガイド

首藤虎男
仔細ありノート言えなく責めを負い
迷いつれ誰かいないか樹々木立
蛙鳴きなに殿様良きはがれ

壽命秀次
妻とのるわがシーソーは秋空へ
落鮎や投網の風呂敷広がりぬ
食欲の秋で諭吉の忙しさ

白井道義
ずんどうがーの売り物鶏頭花
台風も昔は色気ありました
へぼ将棋三番勝負夜長し

杉村福郎
蚯蚓飼ふ耳になりしか蚯蚓鳴く
猫見上ぐ瓶にさされし猫じやらし
飼ひ主の瘦身にして馬肥ゆる

鈴木和枝
北海道が暑いほんとの九月はどこ
デパートに苦瓜が並ぶ安堵の顔で
半値の南瓜女が主婦になる時

森岡香代子
刈田にはなんにもないのに稲雀
尽きることなし晩夏のおしやべりは
秋灯下ゆるゆる作る晩ご飯

森 要
白露過ぐ残る暑さはまだざんしょ
ボランティアつくつく奉仕と蝉も鳴く
耳鳴りを消して優しや虫の声

諸中昌之
シジミ採ると云つてはチョウ採つて来る
鮭半見吊るす油彩を久知也遠加
麻雀の鬼も八十秋裕

八木 健
ウソ寒の季語を漢字で書いちやだめ
むかごてふ虫を炊き込みむかご飯
天高く馬はダイエットなどしない

山内重昭
幻聴は夕空晴れて秋風吹き
物忘れ三つ続けて秋思かな
野分はも流れ千切れる雲の音

山口えつこ
一周忌までの貞節鳥渡る
照紅葉子抱き地藏は丸顔で
恋ふひとを見てみるだけの一位の実

山口濤聲
仁丹の粒は手のひら秋の虹
落葉道風孕むかのナースの衣
鬼灯の音を競いて下校の子

山本あかね
宝蔵院免許皆伝通草裂け
魚ん棚秋鯖どんと到着す
未成りの瓢箪ばかりわが庵は

山本けい子
焼秋刀魚食べ尽くされて皿残る
絵ごころの有ればモデルの南瓜かな
電柱を登りつめたる葛の花

山本 賜
踏切が鈴虫煽る田んぼかな
そよ風のくすぐつたくて曼珠沙華

鈴木 清
無農薬野菜といえど虫だらけ
稲穂消え蒲穂壮んな山田かな
撫子もジャパンがつけばアマゾネス

横山喜三郎
痴漢ごと美女の手を取り運動会
究極の愛蠶螂の食はれけり
吾子のほか見えぬ目となり運動会

鈴木 栄
苦瓜や断りきれぬお裾分け
回らない寿司屋の鱸誕生日
隣家へはみ出す柿のお裾分け

吉田恵子
芋炊きや歌声聴くも芋が先
イベントを笑っているか秋の雨
秋高し連立政権スタートす

高田敏男
菊人形敵を前に萎れたり
義兄弟蚊に刺され血が通う
駆けつこは何時も殿運動会

吉野香風子
古里の駅舎に外してサングラス
十薬を干して当分しない気
夏の陽にしりをこがして野雪陰

高田菲路
調教の成果上がらず馬肥ゆる
熱戦を識らず外野の秋茜
その昔夜霧と言へばディックミネ

渡辺さだを
翡翠の求愛餌を投げキッス
山頭火忌や浄財で女郎買ひに
女体皆影やわらかし秋日傘

高橋真紀子
木犀のしわ望遠鏡で覗き見る
夜食食ふ何カロリーか気にしつつ
晩酌のBGMの虫時雨

渡邊美代子
佐久過ぎて浅間小浅間秋の雲
天龍川のしぶきかゝるや柿すだれ
木曾駒岳の初冠雪や鹿の影